

〔守貞漫稿六生業〕蠟燭之流買

挑灯燭臺等、都テ燭ノ流レ餘ル蠟ヲ買集ム、風呂敷ヲ負ヒ秤ヲ携フ、

〔皇都午睡三編上〕江戸市中略蠟燭の櫃賣は格別、いか程買ふ共、一挺々々紙にて卷あり、○中都

て跡の埒よき事のみを玄たるなり、○中略

吉原芝居町などへは、蠟燭の流れ買ふくとも云ひ歩行けり、

〔橋庵漫筆五〕世俗蠟燭の尻を吹く事つねなりしを、年頃不審かりしに、予○田宮仲宣游歴中、田家に居

をトする頃、野狐甚多く、夜行唯提灯のらうそくを取らる、事數度有て困れり、或人教て曰、らう

そくの尻を吹くべしと、扱其後は試にらうそくの尻を吹くに、再び野狐に取らる、うれひなし、

夫野狐は人の息のか、りたる物を喰はず、人の食ひ餘りの物を食する事なし、故に斯のごとし、

夜行蠟燭の尻を吹がよろし、

松明
名稱

〔倭名類聚抄十二燈火具〕松明 唐式云、每城油一斗、松明十斤、今按、松明者、今之續松乎、

〔箋注倭名類聚抄四燈火具〕通鑑唐肅宗紀注、松明者、松枯而油存、可燎之以爲明、燕間錄云、深山老松、

心有油者如蠟、山西人多以代燭、謂之松明、松明見貞觀儀式大嘗儀、續松見三代實錄、仁和元年紀、

及大嘗祭主殿寮等式、都以末都、見伊勢物語、空物語吹上上卷、即續松也、或謂之太、以末都、見空物

語吹上下卷、蓋燃松之義、按軍防令義解云、松明是松之有脂者、是松明謂松樹赤心、今俗呼松秀是

也、續松疑用松明所造炬火、今俗呼多以末都者、則即續松也、不得云松明、然齋宮寮式云、松明三百

把、大嘗祭式云、松明四荷、似謂續松爲松明、故源君注云、松明者、今之續松乎也、

〔倭訓栞前編十六〕ついまつ 和名抄に松明をよめり、三代實錄に續松と書り、伊勢物語にも見え

たり、手火松とは別也、松のひでを物してまとひつぎて燒故に、續松といふ也、よてついまつの墨

してと書り、清少納言もさるさままたり、こゝにや本づきけん、